

## 論文要旨

**目的** 予定日超過による医療介入を必要とせず自然に陣痛発来となるように、開業助産師が行っているケアの実践を明らかにすること。

**方法** 質的記述的研究である。関東近郊で助産所を開業している助産師 6 名に半構造的インタビューを実施した。

**結果** 本研究で得られた陣痛発来を促すケアの多くは、分娩が順調に進むために、心身を整える準備として、すべての妊婦に対して実施されていた。しかし、前回の分娩のヒストリー、内診・外診、更には妊婦の言動から、予定日を超えることが予測される妊婦に対しては、介入する量を増やす、開始する時期を早める、方法を複数組み合わせるなど、個別的なケアが提供されていた。即ち、自然陣痛発来を促すアプローチは、分娩が順調に進むためのケアの延長線上にあった。

陣痛発来を促す方法として、3つのカテゴリーが抽出された。【児頭の下降を促す】は〈スクワット〉、〈さらしを巻く〉、〈目を休ませる〉、【張りを促す】は〈卵膜剥離〉、〈運動強度を上げる〉、〈乳頭刺激〉、〈セックス〉、〈ひまし油を飲用する〉、〈ひまし油を塗用する〉、【循環を促す】は〈鍼灸〉、〈温浴〉が具体的な方法である。中でも、〈スクワット〉、〈卵膜剥離〉、〈運動強度を上げる〉はすべての研究協力者が実施し、次いで〈鍼灸〉が6名中5名の実施であった。こうしたセルフケアを妊婦が実践できる助産所のケアの背景として、【丁寧な関わり】、【仲間の力】、【身体を通した動機づけ】の3つのカテゴリーが抽出された。また、分娩に向けて準備を開始する時期は、早産予防に重きを置いた【正期産に入ってから取り組む】と、10ヶ月かけて分娩の素地を身体につくことに重きを置いた【妊娠初期から取り組む】の2つのカテゴリーが抽出された。しかし、様々な取り組みを実施しても予定日を超える妊婦はおり、開業助産師が捉える特徴として、【お産に対する恐怖心が強い】、【他に気がかりなことがある】、【出産間近の自覚がない】、【考えに柔軟性がない】、【本当の自分を表現できない】、【ストレスを抱えている】の6つのカテゴリーが抽出された。その特徴がみられる妊婦に対し、【気持ちを緩ませる支援】と【分娩に対する心構えを促す支援】が、妊婦の様子に合わせて、バランスをとりながら実施されていた。

**結論** 開業助産師たちは、陣痛発来を促すケアを分娩が順調に進むためのケアの延長線上に捉え、妊娠期を通して、あるいは正期産に入り早期に、分娩の4要素を整える働きかけをしていた。即ち、分娩の3要素だけではなく、性格、生活環境、家族関係等がもたらす妊婦の精神面を含めて、妊婦の全体像を捉えてアプローチすることが重要である。妊婦が実行可能なセルフケアを妊婦と共に考え、支えるきめ細やかなケアにより、予定日超過による医療介入は極めて少ない結果となっており、同様のケアを多くの妊婦が享受できるようなシステム構築が必要である。